

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のある問題は句読点を一字に数えます。

「皮肉」や「アイロニー」と呼ばれるものにはさまざまな発言や事態が含まれますが、単純なものは、周りから見ても明らかに間違っている、真逆なことをわざと言うような例でしょう。たとえば、どこからどう見ても汚い字を書く人に、「とても字がお上手ですね」と褒めることは皮肉です。ちなみに、著者は母親から、「ゆうさんはほんとに字が上手やねえ」と言われて育ちましたが、これはどっちですか。

私たちの発言には、文字通りの意味の他に、発言した人が伝えようと思った意味があります。そのような内容は「話者の意味」と呼ばれます。

①文字通りの意味と話者の意味がまったく同じか、それほど変わらないときもありますが、文字通りの意味と話者の意味がまったく異なることも、普段の会話でよくあります。

たとえば、「今何時か分かる？」と聞かれたら、みなさんは「えーっと、十時二分前かな」などと時刻を教えると思います。しかし、文字通りの質問に答えるために、時刻を言う必要はありません。「あなたは分かるか？」と聞かれているのですから、「はい」か「いいえ」で答えて、分かるか分からないかを伝えれば、十分に質問に答えたことになります。「今の時刻を私に教えてください」とは言われていないのです。実際、「今何時か分かる？」や「今日は何曜日か分かる？」を①で聞くこともあります。たとえば、そろんで頭をぶつけた人に、意識がはつきりしているか確認しているだけかもしれません。「あ、はい、分かります。大丈夫です」と答えてもらえれば、それで十分な場合もあるのです。

さて、自分が皮肉を言っていることをはっきりさせたいときは、普段の喋り方とちよつと変えた言い方をします。たとえば、サッカーが苦手な人に向かって、「え、めつちやサッカーうまいですやん！」とわざとらしく言うようなことです。発音を強調したり、身振り手振りを大げさにしたり、とにかく普通に言っているのではない、ということとを別のやり方で伝えます。そうすると、言われた側は、本当にそう思っているのなら、普通の言い方で発言したはずだから、普通の言い方をしていないということとは、文字通りではない話者の意味があるのだな、と考えることができます。そして、文字通りでないメッセージはなんだろうか、ああ、バカにされているんだな、とすぐに伝わります。

このように、②を使うことで悪口を言っていることがすぐ分かる発言もあれば、悪口かどうかよく分からない、おそらくは誰にも決められない微妙な発言もあるでしょう。「うっていいなあ」などはその一例です。「うさんは悩みがなくていいですね！」「学生は時間があつていいなあ」「田舎はごちやごちやしてなくていいなあ」「文系は課題が少なくていいなあ」などと、皮肉でもなんでもなく、素直に言われることがあるでしょう。そして場合によっては、かなりイラッとした経験はないでしょうか。しかし、「いい」と言っているのですから、けなすよりむしろ褒めています。誰かが劣っていると書いているわけではないので、悪口になりようがないと思われるかもしれませんが、このような事例を理解する際も、本書の考え方が役に立ちます。

こうした「褒め」が悪口につながるのにはいくつか理由があります。ひとつは、②発言の解釈にやはり優劣の比較が入り込み、悪口として理解される可能性があるとということです。「悩みがない」というのはもちろん良いことでもありますが、「私に比べて精神的な複雑さの度合いが低い、精神的により未熟だ」という比較を述べているとも解釈できます。③「とは言っていないからです。」

存在のランキングを思い出してください。昔から、人間が他の動物より「上」だと考える大きな根拠は、人間が持つ精神的な能力の高さだとされてきました。腕力ならクマの方が強いが、計算をしたり詩を書いたりできるのは人間だ、というわけです（そしてなぜか後者の方が偉いとされています）。人間が人間に対して持つ偏見にも、知的な能力や道徳性などがより低いとみなす、というものがあります。たとえば、人種差別的な偏見の典型例として、その差別の対象となっている人々は、感情がより単純であるとか、善悪の区別が理解できないといったものがあります。

「悩みがなくていいね」も、精神的成熟度についてのランキングの中で、人が下に位置づけられたと理解されるかもしれません。自分とは違って、何かが「単純でいい」「簡単でいい」「楽でいい」などとするのは、知的な能力の優劣、社会的な優劣のランキングについて、暗に述べているのかもしれない。そうすると、表面的に「いい」とは言いながら、ランク上で劣っているとも言っているわけですから、悪口とみなされるわけです。

こうした発言が悪口になりうるもうひとつの理由は、尊敬に関わります。アメリカの哲学者ハリー・フランクファートは、③人を尊敬することは、その人と他の人とを平等に扱うことと実は関係がない、という一見驚くべき主張をします。フランクファートによると、尊敬するためには、その人の個別の事情、その人個人の特徵や状況にきちんと注意を払って、その人にとって必要なことを考えないといけません。単に平等の扱いにするだけでは、その個別の事情を汲み取ることができない場合があります。そうすると、その人物を尊敬しているとは言えないのです。たとえば、車椅子の利用者に、「ここはみんな平等に歩くところだから」と言つて、階段を上るのを手伝わなかったら、それはその

(時間 問題用紙二枚で五十五分)

◎解答は解答用紙に記入しなさい。

人物に敬意を払っているとは言えないでしょう。

さて、「若者はいいいね」や「田舎はいいいね」などは、一種の決めつけに聞こえてイラッとします。これらが決めつけであるのは、それぞれの事情に注意を払っていないからです。それぞれの人間は果てしなく複雑で、本人にしか分からない個別の事情や苦勞が存在します。私たちはそれをわざわざ他人に④から十まで説明したりしません。それにもかかわらず、たつたひとつの特徴を取りあげられて、それによって他の苦勞がなくなるかのように言われたら、「私はあなたの他のところを見ていませんし、見る気もありません」と宣言されているようなものです。それは誰かを尊重した態度とは言えないわけで、多少イラッしてしまうこともあるでしょう。

この節では⑤褒めることですら悪口になりえることを確認しました。(和泉悠「悪口ってなんだろう」による)

問一 ①にあるア「文字通りの意味」と、イ「話者の意味」のうちで、②に入るのはどちらですか。それぞれアかイの記号で答えなさい。

問二 ②とは、どういうことですか、「悩みがない」という発言を例にして説明しなさい。

問三 ③に適する表現を次から選び、記号で答えなさい。

ア 私にも悩みがあるんだ
イ 私も悩まざるをえないんだ
ウ 私も悩まないわけがないんだ
エ 私も悩みがないんだ

問四 ③のように言えるのはなぜですか、説明しなさい。

問五 ⑤のように言えるのはなぜですか、八十字以内で説明しなさい。

問六 ④に関連して、次の□a□eに漢数字を記入して、ことわざや四字熟語を完成させなさい。

・三つ子の魂 a まで
・惡事 b 里を走る
・三寒 d 温
・岡目 e 目

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「ぼく」(勇哉)は、駅伝大会でクラスの選手になるのがいやで、嘘をついてくじ引きをまぬかれた。その後、ねんざしたふりをしているうちに本当に足がいたくなり、伊勢崎整体院で治療を受けた。翌朝、「ぼく」が近所の日の出公園に行き、カバヒコ(カバの形をした遊具)に話しかけている場面である。

ぼくはカバヒコの前にしゃがみ、カバヒコの後ろの右足をすりすりとなでながら、思わず話しかけた。

「走るのがこんなにイヤなんて、ぼくはほんとに弱虫でダメだな……」すると、「ダメじゃないぞ」と声がした。

びっくりした。カバヒコが、しゃべった？

あたりを見回すと、いつのまにか、ブランコのそばにスグルくんがいた。

「走るのがイヤだと思ふことなんて、ぜんぜんダメじゃない。イヤなもんはイヤだろ」

スグルくんはそう言つて、上着のそで口で鼻水をぬぐつた。何度もそうしているのか、そで口はもう、かびかびになっている。

ぼくはしゃがんだままたずねる。

「スグルくんも、本当は走るのイヤなんじゃないの？ 駅伝なんか、出たくないつて思わないの？」

うーん、とスグルくんは首を(×)。

べつに、イヤじゃないよ」

「でもスグルくん、走るのそんなに④トクイそうじゃないし……」

「そう、おれ、足おそいんだよなあ」

だよなあ？ 走るのおそいつてわかっているのに、どうして平気なんだ？ ぼくはその言葉を(γ)ながらたずねた。

「……だって、みんなが見ている中を走らなきゃいけないんだよ？」

「うん？ ああ、そうだねえ」

スグルくんは、へへへ、と笑つた。

「駅伝、やったことないからさ。おれに番が回ってきたから、まずはやつてみるつていう、それだけ。もしかしたら楽しいかもしれないし、やつぱりすくつらいだけかもしれないし、でもそれつてやらないとわかんないじゃん」

それを聞いて①ぼくは、なんだか息が止まるみたいな思いがした。言葉も出ず、動くこともできず、まるでカバヒコと一体になったみたいに固まっていると、スグルくんは急にちよこちよこ足がみを始めた。「じゃ、おれ、ここから走つていくから。自主練、自主練。この公園を折り返し地点にしているんだ。あとで学校でね！」スグルくんは公園を去っていく。自主練として、登校のときに遠回りして走つてるんだ。ひとりり、ランドセルをしょつたまま。

やっと、わかった。
ぼくの体と心が本当にイヤだったのは、走ることで自体じゃない。
ただ、みんなにカッコ悪いところを見られるのがイヤだったんだ。
走るのがトクイな子たちの中、もしもランナーになってしまったら、ぼくが出たとたん、あつというまにビリになってしまっただろう。

全学年の同じ組の子たちの怒りを買って、見ている人たち全員から笑われ、駅伝当日だけじゃなくこれからのぼくの学校生活は絶望的になるだろう。

ぼくの頭は、そう考えたんだ。
だからそんなこと、どうにかして避けなくちゃって。

スグルくんは、そんなことちっとも気にしていない。みんながどう思うかなんて。

他のだれもやりたがらなかったランナーを、⑥モンクひとつ言わず引き受けたスグルくん。

トクイじゃなくてもやるからには全力で取り組もうとしているスグルくん。

ぼくが足を引かずっていることに、気がついてくれたスグルくん。

ぼくはスグルくんの強さもやさしさも、まったくわかっていなかった。

②カバヒコに頭をおしつけながら、ぼくはこらえきれずに泣いた。
涙といっしょに、勝手に言葉がこぼれてくる。

心と体が、カバヒコに聞いてもらおうとしているみたいだった。

「ぼくは……ぼくは、どうやったら自分が駅伝に出なくてすむかってことばかりで……嘘をついて……それが思い通りにいったことで、ますます苦しくなって……」

そこではっとした。
今ぼくは、なんて言った？

ああ、そうか。そういうことなんだ。

体が緊張しているのは、「③」

頭が、間違えちゃったんだ。
ホントのホントは、嘘なんてつきたくなかったんだ、そうだ、ぼくは……。
そういう自分のことが、イヤなんだ……。

次の週、ぼくはまたお母さんといっしょに伊勢崎整体院をおとすれた。

伊勢崎さんからの「ふたつの宿題」は、ぼくなり仕上げてきたつもりだ。
体のバランスを整える④タイソウは、朝、学校に行く前と、夜、お風呂に入っ

たあとの二回、毎日こなしした。

そして「足から意識を飛ばす練習」は、伊勢崎さんの言うとおりに、目の前のことに集中するように心がけた。

びつくりした。意外な④コウカの連続だった。

たとえば、ごはんを食べるとき、何が入っていて、どんなふうに調理されているかをちよつと注意して見るだけで、前よりもおいしく感じた。歯をみがくとき、歯のことだけを考えていたら一本ずついいねいにブラシを当てようという気になった。授業中、黒板に書かれていることをノートに写すとき、なるべくきれいな字で書くようにしたら内容をすく覚えやすくなった。

あたりまえのことかもしれない。

でも今までのぼくは、出された食事を特に気にとめずに口に入れていたし、歯みがきなんてささっと適当に歯ブラシをくわえるだけだったし、黒板をろくに見ていないときさえあったのだ。

そしてその「練習」は、そのときだけじゃなく、④ふだんの生活の中で意識が変わっていくことになった。

お母さんがいつもどうやって献立を決めているのか想像したり、歯ブラシの形や大きさにいろんな種類があることを知ったり、今まで好きじゃなかった教科にちよつと興味を覚えたり。

爪を切るとき自分の指の曲がり方、鉛筆の芯のにおい、傘にあたる雨音。目の前のいろんなことに集中してみると、それまで気がつかなかった発見がたくさんある。そうしているうちに、足のことを気に(z)時間が少しずつ減っていった。

そして伊勢崎さんのところに行くころにはもう、足にとらわれなくなっていた。あんなに悩んでいたのに、いつのまにか④イタミを忘れて、なんだか体がほかほかしていた。

前と同じようにふたりきりになった部屋で、うつぶせのぼくの体に手を当てた伊勢崎さんは「おう」と息をもらした。

「すごいな。一週間でこんなに整えてくるなんて、びつくりしたよ。体のこわばりもずいぶん取れて、やわらかくなってる」

ぼくはうれしくなって、顔だけ伊勢崎さんのほうに向けてトクイげに言った。

「ぼくの足、リカバリーしましたか」

伊勢崎さんは「ええ？」とちよつと笑ったあと、大きくうなずいた。

「そうだね、リカバリーしたよ。お④ミコトだ」

「じゃ、これで元どおりですね」

にやにやしながらベッドの穴に顔をうずめると、伊勢崎さんは穏やかに言った。「ちよつと違うかな。人間の体はね、回復したあと、前とまったく同じ状態にも

どるというわけじゃないんだ」

「えっ」
「病氣や怪我をしたっていう、その経験と記憶がつく。体にも心にも頭にもね。回復したあと、前とは違う自分になってるんだよ」

ぼくはとまどった。

穴から少しだけ顔をぬき、伊勢崎さんにたずねる。

「前とは違うって、良い自分なんですか、悪い自分なんですか」

「それは僕には決められない。ただ、その人が良い方向に行くようにと願いながら、僕は僕の仕事をしてる。少なくとも勇哉くんは、足がいたくなる前にはわからなかったことが、わかってきたんじゃないかな。だから、それをこれから良いほうにいかしていつてくれたらいいな」

伊勢崎さんはそれからだまって、ぼくの体をいいねいに押し続けた。

ぼくは伊勢崎さんの指を背中に感じながら、ぼんやりと、リカバリーのそのあとのことを考えていた。

翌朝、ぼくはまた早起きをして、日の出公園に向かった。

そしてカバヒコにひとこと、心をこめてお礼を言うと、背中にすわってスグルくんが通るのを待った。

ブランコ、すべり台、砂場、ベンチ。小さな公園に置かれたそれらは、どれも古くなっている。

この公園、何年前からあるんだろう。カバヒコって何歳なのかな。

そんなことを思っているうち寒くなってきたて両腕をさすり始めたころ、公園の植えこみの向こうを走っているスグルくんの姿を見つけた。

ぼくはカバヒコから飛び降りる。

公園の外に出ようとすると、中に入ってきたスグルくんと向かい合う形になった。

「あれえ、勇哉くん」
「お、おはよう」
「おはよう。またここで会ったねえ」

スグルくんは息を切らしながら、うれしそうにそう言った。

「スグルくんが来るかなと思って、待ってたんだ」
「ええー？ おれのこと待ってたの？ なんだ」

ぼくはぎゅつとこぶしをにぎり、スグルくんを正面から見ると、

「あの、あのさ。駅伝まであと一週間だる。自主練、ぼくといっしょにやらないか」
「勇哉くん？」

口をぽかんと開けているスグルくんは、ぼくはうなずく。

「ぼくも走るの苦手だから、正しいフォームとか教えることはできないけど……いっしょに走ったら、楽しいかもって思ったんだ」

スグルくんは「ひやあ」と変な声で叫んで、両手をぶんぶん振った。

「ほんとに？ うれしいなあ！」

小おどりしているスグルくんを見て、ほっとした。

めいわくがられたらどうしようと思っていたけど、思い切って言うてよかった。

スグルくんは振り回していた手をふと止めて、心配そうにたずねてくる。

「でも勇哉くん、ねんざはもうだいじょうぶなの？ それに走るのイヤって言うてたよなあ」

ぼくはきつぱりと答えた。

⑤「だいじょうぶ、リカバリーしたんだ。もう、前と同じぼくじゃない」
(青山美智子『リカバリー・カバヒコ』による)

※(注) カバヒコ：その遊具にお願いすると回復(リカバリー)するとのうわさから「リカバリー・カバヒコ」と呼ばれている。

スグル君：駅伝の選手が決まらず、クラスでくじを引いた結果、選手に選ばれてしまった同級生。

問一 ~~~~~ ①のカタカナを漢字に直しなさい。
問二 (一) x y z に当てはまる語を、次のア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

(x) ア ふった イ かたむけた ウ すくめた エ 長くした
(y) ア 返し イ にごし ウ かわし エ 飲みこみ
(z) ア さわる イ やむ ウ いる エ かわない

問三 ~~~~~ ①とありますが、スグル君の言葉を聞いて、そのような思いになったのはなぜですか、説明しなさい。

問四 ~~~~~ ②とありますが、「ぼく」はなぜ泣いたのですか、説明しなさい。

問五 「③」に当てはまる文を、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
ア 嘘をついてしまった後かいでがっかりしているからだ。
イ 仕方ないって言いわけをしてそわそわしているからだ。
ウ ずるいことしたって罪悪感でびくびくしているからだ。
エ 嘘がばれるかもという恐怖でおどおどしているからだ。

問六 ~~~~~ ④とありますが、ここで「ぼく」の意識がどのように変わっていったかを説明しなさい。

問七 ~~~~~ ⑤とありますが、ここでの「ぼく」の気持ちを説明しなさい。

問

2

(b)

問
二

問
三

問四

問
五

問六

問

問
二

問
一
三

問四

問五

問六

問
七

a

b

C

d

e

(a)

(b)

©

④

©

Ⓣ

X

 y
$$\mathbb{Z}$$

1850

1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
7	7
8	8
9	9
10	10
11	11
12	12
13	13
14	14
15	15
16	16
17	17
18	18
19	19
20	20
21	21
22	22
23	23
24	24
25	25
26	26
27	27
28	28
29	29
30	30
31	31
32	32
33	33
34	34
35	35
36	36
37	37
38	38
39	39
40	40
41	41
42	42
43	43
44	44
45	45
46	46
47	47
48	48
49	49
50	50
51	51
52	52
53	53
54	54
55	55
56	56
57	57
58	58
59	59
60	60
61	61
62	62
63	63
64	64
65	65
66	66
67	67
68	68
69	69
70	70
71	71
72	72
73	73
74	74
75	75
76	76
77	77
78	78
79	79
80	80
81	81
82	82
83	83
84	84
85	85
86	86
87	87
88	88
89	89
90	90
91	91
92	92
93	93
94	94
95	95
96	96
97	97
98	98
99	99
100	100

[illegible]

x	
y	
z	

(a)	
(b)	
(c)	
(d)	
(e)	
(f)	

a	
b	
c	
d	
e	

[illegible][illegible]

1885

1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
7	7
8	8
9	9
10	10
11	11
12	12
13	13
14	14
15	15
16	16
17	17
18	18
19	19
20	20
21	21
22	22
23	23
24	24
25	25
26	26
27	27
28	28
29	29
30	30
31	31
32	32
33	33
34	34
35	35
36	36
37	37
38	38
39	39
40	40
41	41
42	42
43	43
44	44
45	45
46	46
47	47
48	48
49	49
50	50
51	51
52	52
53	53
54	54
55	55
56	56
57	57
58	58
59	59
60	60
61	61
62	62
63	63
64	64
65	65
66	66
67	67
68	68
69	69
70	70
71	71
72	72
73	73
74	74
75	75
76	76
77	77
78	78
79	79
80	80
81	81
82	82
83	83
84	84
85	85
86	86
87	87
88	88
89	89
90	90
91	91
92	92
93	93
94	94
95	95
96	96
97	97
98	98
99	99
100	100

(a)	
(b)	